
青春の肖像 6

山之口 博道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春の肖像 6

【コード】

N8126F

【作者名】

山之口 博道

【あらすじ】

遠い思い出の少女の幻影を追い求めます。

第6章

6 洋館その2

寄宿舎の脇を抜けていくと、やがて小道に出て、その先にいまはもう使われていない、林道がある。さらに道なりにたどると、やがて大きな門が見えてくる。それは
こんな山奥にありえない風景だった。

私と野梨子そして博士は、さびたかんぬきを空けて、中へ入った。そこには立派な洋館がそびえていた。

「凄いよね。まるでお城みたい」野梨子は無邪気にはしゃいでいた。荒れ果てた、芝生と西洋庭園が、そして今にも噴出しそうな石造りの噴水も、まるでヨーロッパの大公国にでもタイムスリップしたような。

「中へ入ってみますか？」博士が言った。

「でも、だいじょうぶかな？」私は無断侵入に抵抗があった。

「大丈夫ですって。何度も入ってるんですから」

玄関は半ば崩れて、容易に開いた。

博士が入り私も続いた。

そのとき、私は野梨子の息遣いをまじかに聞いた。

野梨子は私の腕にすがっていたのだった。

少女らしい香りが私をつつんだ。

暗い廊下を抜けるとホールに出た。

シャンデリアと家具などの調度品もほこりをかぶって時がとまったように

そこにあつた。

「私、まるで王女様見たいね。」振り返ると野梨子は大きな椅子に座ってこちらを見ていた。

そうだ、確かに色白の髪の毛のながい野梨子はまるでどこかのプリンセス

スのようだった。

バルコニーに出るとそこからは山並みが一望できた。

私たちは飽きず眺めていた。

「私、これからどうなるんだろう?」

野梨子が突然そうつぶやいた。

「どうなるって?」私は思わず聞き返してしまった。

「また入院するのかな、やだな。」

「大丈夫だって、野梨ちゃんは、つよいんだからさ。」

博士がそんなことをいって野梨子を励ましていた。

私はそれ以上聞くこともできずただ野梨子の横顔を見つめていた。

こんな山奥にこんな分教場にこんな少女がいたなんて。

これは夢で本当は私はあの実家の縁側で寝込んで夢を見ているだけなのかもしれない、何て思ったりする私なのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8126f/>

青春の肖像 6

2010年10月28日07時38分発行